清十郎五十年忌歌念佛

近松門左衛門作

上之巻

序幕　通し車は小町が仇の情に乗せられ。閨の扇は班女が親骨にせかれ。形見の烏帽子は行平の言ひかぶり。柏木の鞠山路が笛。古今其の品變れども皆これ戀路の寄せ框。根太も根強き門柱。其の但馬屋の初色に立つや浮名の濡草鞋。笠がよく似た菅笠のオロシ〳〵雫つもりて。戀の淵。地湧きて流るゝ和泉の國。水間の里の左治右衛門畑作りの田烏や。鳶が生んだる高給取の手代は主の代をも。清十郎といふ子を持つてフシ老の入り前暮しよき。地正月着物播磨潟延引ながら年頭に。娘はおしゆん嫁の名も三人連の木賃宿。明日は出舟の名殘とて。道頓堀の芝居過ぎ。名所々々は大阪の娘子達に交りても。打てす押されす手入らずの。田舍生れのおほこにも父の乗りたる便船の。しるしは如何に錨綱。たぐり着いたぞ日は傾く。いさ急がんとちよこ〳〵走りとは河口にぞ着きにける。地親左治右衛門苫打上げて。詞やあこりや〳〵こゝぢや〳〵。はれやれ〳〵大膳な暮れる迄。大阪の町をふら〳〵と。女の身にて何事ぞタも東の横堀で。男と女子と喧嘩して濱納屋の下で。組んづ轉んづして居たを幾はなか見て來た。扱ひになりしやら錢をついたも慥に見た。大阪の喧嘩は大方相場が極つて。地十文では事がすむ喧嘩は降りもの和御寮達。若しもの事があつたりともいかな九文半文でも。堪忍ばし召さるなとッ眞顏に言ひしも殊勝なり。詞二人の娘打笑ひさればいの。今日も一日芝居見てそれから此處の河口の。八景とやら見物してつひ今になりしとて。地舟に乗れば左治右衛門草履菅笠片付けて。先づ〳〵休めやといふ處へ向の舟の船頭來り。詞和泉の國の左治右衛門殿は此の舟にか。此方の舟の乗手衆がちとお目にかゝり度い。播州姫路但馬屋の勘十郎といへば。合點ちやけなとぞ申しける。左治右衛門聞きも敢へすヲ、知つた〳〵。但馬屋の勘十郎殿わしが息子の傍輩衆。地參つてお目にかゝりませうと上らんとする所に。是へ見えしと勘十郎なんと〳〵親爺殿。詞扨も年も寄らぬわ不思議な處で逢ひました。先づ以て御無事にて一段清十郎も息災で。商賣の用事にて此の處へ上りしが早や下つたも存ぜず。旦那も折々噂なり何故に見えぬと言ひければ。あい勘十郎殿樣お久しう御座ります。嫁子供が申すにも親爺ちと旦那樣へ行かつしやれ。何かの御禮も申さつしやれと申しまする。ヲ、〳〵は申しながら正眞の貧乏隙なし。物作の事なれ

ばいや大根時の綿時の。瓜を蒔くは茄子を作るは牛蒡畑豆畑。粟よ黍よ藍時よ。麥を蒔くぞ赤らむぞ田を植ゑては草取る。穂が出れば刈りまする籾になれば磨りまする。米になれば炊きまする飯になれば食べまする。地何ぢやし只居る間とてなく　フシ御無沙汰とこそ語りけれ。地勘十郎打領き詞尤何方も暇はなし。して此の舟に乗つて何方への下りぞといへば。先づ旦那へ春の御禮も申し清十郎にも逢

はんと存じ。是は妹おしゆんあれは行く〳〵清十郎が。留守をもさせんと存じおさんと申し娘分。連れて姫路へ罷下る。とてもの事に御同道致さんと言ひければイヤコレ逢ひ度いといふは其の事よ先づ下る事は入らぬもの。清十郎が沙汰を聞かぬか扨々氣の毒笑止な事。旦那の娘お夏様と密通して。お夏様のお腹は茶壺を抱いた様になる。それに立野の一門中へ祝言が極つて。嫁入道具も出來揃ひ身ど

もが道具を請取つて。地下り次第の嫁入あの腹の土産物。聖から證議があるは定否でも應でも清十郎は。片假名の木の空で此のやうに手を廣げ。引張凧は知れた事親兄弟も同罪なり。どうぞ嫁入の無い先に。身を引く思案がさせたさに フシ知らせまするとと威しける。地親は在所の律義者何の巧みのありとも知らず。アヽお前は如來樣内々どうやら承り。氣遣致せし折柄なり傍輩の好みとて御知らせ有難し。年六十に餘りて火屋へ片足踏み込んで。一人の悴が木の空で。引張凧になるのが。そもや見て居られうか悴が命助かるやうに。御思案頼み奉るさりとは誰に似て。下心の悪い悴めとどこで聞いてか言ふ事とエテ泣いて口說くぞあはれなる。詞時に船場に案内して。姫路の本町但馬屋の勘十郎樣のお船は是か。難波橋の蒔繪屋誂へのお道具今宵船に積まんと存じ。銀子請取り申さんため參りたりとぞ言入れける。あれ親爺聞いてか。銀も渡せば道具が下る道具が下れば嫁入がある。嫁入があれば清十郎は引張凧。なんとこゝが談合。身は國へ歸つて旦那へは道具屋が出來さぬ分ですまし置く。あの道具屋の手前は親爺から。百五十兩か八貫目渡してさへ置いたれば。波風立たず嫁入が延びる。地延びさへすれば清十郎暇を取らうと走らうと。此の勘十郎請取つた茲は親爺大儀ながら。八貫目何ぞいの田地賣つても子の爲ぢや。出したがよいと言ひも果てぬに左治右衛門ぎよつとして。詞エ、あり樣は一口に八貫目。縱へ清十郎引張凧にならうが乾鮭にならうが世が泥の海になるとても。地一文も金は無いエ、此方は皮か身か合點が行かぬと顏しかめ立つて入るを引止め。それは親爺廻り氣な。然らば銀も入らぬ思案がある。あの蒔繪屋に向うて。此の娘には構ひあつて嫁入はさせぬ。道具はそちへ預けた銀渡したら損であらうと。一言いへば濟むぢやがなるまいかと言ひければ。ハテ銀さへ入らぬ事ならば。我が子の爲ぢや申さいではと表の間にぞ出でにける。播磨の姫路但馬屋の嫁入道具を。請取つた蒔繪屋は此方か。身どもは和泉のどん百姓土ほぜりでおじやれども。但馬屋のお夏にはこつちに先の構ひがある。外の男を持たせぬからは嫁入道具を抑へた。勘十郎殿さつきにから切羽詰金する通り。銀渡したら御損であらう。斷つて置いたぞと苦り切つてぞ申しける。地蒔繪師の手代せゝ笑ひ。詞ハテサテ悪い工面ななされやう。これ娘に構ひあるならばそれは先との詰開き。此の方に構はぬ事。どうでも是は廻し者。近頃悪い仕方といへばヤア。何ぢや廻し者。チヽ男ぢやもの廻しをせいでよいものか。若い時は小相撲の一番もひねつた俺ぢや。地男に使ふ詞があるこしかいたがかゝぬか。來い見せうと裾からけ フシ胸を叩いて力みける。地蒔繪師も聞かぬ者片肌脱げば二人の娘。船頭船方下り合せ先づ堪忍と取付きける。勘十郎も

分入つて樣々宥め押鎭め。圖塗師屋殿も惡い合點道具はそつちの銀はこつちの。銀やらずに此方へ請取らうといふにこそ。其方と我とにあの仁から一筆取つて置くならば。我も旦那の手前が立ち其方も下細工へ手間やらいでも大事なし。身に任せて默つて居やこれ親爺。なんと一筆召されうか。ハテお前の御料簡ならばどうなりとも。それおさんお望み次第に書きやといへば。勘十郎立寄つて。但馬屋のお夏祝言につき構ひ是あるにより。嫁入道具抑へ止め申す所如件。但馬屋勘十郎殿蒔繪師權之丞殿清十郎親左治右衞門と好む通りに書きければ。親は悅び巾着あけ。墨肉黑々と捺したりし。因果の程ぞ不便なる。地一札卷いて勘十郎懷中にしつかと收め。サア埒は明いた塗師屋萬事は國より一左右せん。先づお歸りと言ひければ塗師屋は船中一禮し。辭儀を述べてぞ歸りける。地なう親爺殿此の勘十郎が好い時に居合せて。此方親子の仕合道具さへ下らねば。祝言は延引其の中には清十郎。暇を取らうが走らうが氣遣な事はなし。勘十郎に任されよ此の船今宵出ると聞く。然らば是にと乘移り方々此の度下つては。清十郎が爲惡しし好い時分に便せん。其の時必ず待入るぞや數年馴染の清十郎。惡い樣には致すまじ。いづれもさらばと言ひければ。親子の者は舟より上り手を合せ涙を流して。傍輩の好みとて有難し忝し。生みの親の我等より清十郎めが命の親。嫁も娘もやれ拜め辨へもなき清十郎。弟とも下人とも思召して御意見なされ美しくお暇取り再び在所へ來るやうに。偏に賴み奉ると敵と知らぬ愚かさの。親の情は子の爲に藥といへど是は又。毒を合はする左治右衞門心は律義一杯に。煎じつめたる水間の里舟は。別れて三重へ下りけれ。

中之卷

名付けしぞ但馬壁のお夏が父は九左衞門。國一番の米問屋有銀箱も十づゝに。六十近き月雪や花も紅葉も算盤に。かゝる親には似ぬ娘お夏は深き湯ゆゑに。菩提心と意地張りて嫁入も丈ものび〳〵の。それも戀する氣の前か二人の親の顏迄も。飾簪の徒步路播磨潟。ヲシ國に浮名や立ちぬらん。地今日は蚊帳の祝儀とて萌黃の生絹六。布七布。家の内祝ひ賑へどもお夏は更に氣に染まぬ。心の内の紋子の蚊帳色香を外に漏さじと。アヽ俺や風引いたさうなとて。鼻うちかみて紛らかすヲシ忍び涙ぞ道理なる。心を知らぬ腰元どもお夏樣と聟樣と。此の蚊帳でしげらしやんしたらばいかな藪蚊も羨かろ。こちは蚊帳は及びもないせめて嫁入の紙帳なりと。肖り度いと口々に申しお夏樣。圖新し蚊帳の御祝儀ちと浮き〳〵となされませ。賑かに酒盛して謠ひませうと言ひければ。アヽ何をざわ〳〵しやるぞい。地蚊帳が出來ようが紙帳が出來ようが此の

氣合で今やなど。嫁入する氣は微塵らないあつたら手間であの蚊帳を。生紬の衣にして着たい只無常氣で可笑しうないと。後を見れば父親は内手代の源十郎に帳を讀ませて算盤のつぶ〳〵いやんな喧しい。先づ來て祝やと赤飯のこはい目付は吾が戀を知つてさうなと百千に。碎き割りたる胸算はフシ如何な算者も及ばじな。地かかる所へ清十郎勘十郎同道してぞ戻りける。詞九左衛門悦びヤアよい所へ戻つたは。今日はお夏が嫁入蚊帳の祝ひ。此の拍子ならば大阪の仕合もよかろと言へば。清十郎庭に立ちながら。旦那の病になされた。中國北國殘らず賣つて爲替手形濟みました。地利合は高で二十四五貫目と目を合する二人が仲。無事な顔見て嬉しいと フシ心に心を言はせたり。地九左衛門上機嫌。お手柄〳〵お夏が嫁入は只出來た。詞扨なんと勘十郎。蒔繪道具も出來つらん。跡から來るかどうぞと言へば。お道具も出來致し代銀殘らず渡し。職人の手前は濟みながら不落居な事にて。道具を留められ下りませぬと。言ひも果てぬに九左衛門立腹し。それはどうぢや餘る程銀は遣る。但馬屋九左衛門の嫁入道具留められう覺はない。總じて此の祝言お夏が氣色に。日限延び。やう〳〵此の度騙まで詰め今日明日となつて。道具が出來ぬなんのとて此の嫁入が延ばされよか。世間からは道具屋へ銀渡さぬと評判せん。地それに浮かり〳〵銀渡し素手で戻るといふやうな。子供遣つたも同然と。算盤の割れる程フシ疊を叩いて叱りける。地勘十郎迷惑さうに御立腹御尤。拙者も如かりは致しませぬ證文を御目にかけ。密かな所でお物語致し度い事御座るといへば。ヲ、言譯あらばサア聞かう源十郎も來て聞け勘十郎。こつちへ來いと。打連れ裏の小座敷へオクリ若いへ顔して入りにけり。地清十郎奥を見てハア、餘所には嫁入があるさうな。こちや洗足でも致しませう。やあるいと沓脱に。腰を掛ければお夏つか〳〵走り出で。詞又ねすり言ばつかり。地同じ口で可愛やと言ふ事がならぬか。意地の悪いと抱き付きフシ戀には。涙脆いぞや。詞清十郎懐手アヽ思へば阿呆な者。身の正直な勝手して人の詞をまん誠に。世間の奉公する者は態々暇を貰うては。春は親に逢ひに行く此の清十郎は親里の近所に。十日廿日逗留しても。親の所に許嫁の女房分がある故に。是に逢ふと思はれては心中が立たぬと思ひ。親へ便りもせずに歸る地是に戀りよどうさい坊。ほんに孫子に傳へても。主の娘と念頃などするがの富士と一里塚。及ばぬ事をエヽ阿呆なと フシ舌打。してぞかぶり振る。地お夏涙を押拭ひ。其方と我が身は實事にて。口説などする挨拶か此の度の祝言を。好きこのんだる事でもなし知つての通り母樣は。室の女郎今の内の母樣に。あの弟が出來る迄は我も室で有たし故。詞母方が悪いの傾城の風

があるのとて。地どこの嫁にも嫌はるゝこれぞ能い事幸ひと。なほ女郎の風を似せ人は隠せど我は只。母様は傾城と一季半季の者に迄。蠲れ廻りたる村時雨スヱテ綾には附かじと願ひしに。詞あの立野の阿呆づら敷銀に目がくれて。地嫁に取らうといやらしい此のお夏ばつかりは。言うた事を違へるか恨みもつらみも後を見て言うたがよい。詞總じて其方もこんな時、どうなされかうなされの主あしらひが聞えぬ。地私から詞を直しませう。なうこちの人こち向かんせと、袖口から手を入れて。ほと〳〵叩いて抱き締むる。詞清十郎四邊を見廻してしかしお前に聞えぬ事がある。此の袖下は何事ぞ。若衆の前髪女の脇詰男が知らいでたつ物か。出來ぬ仕方と言ひければ。そこらを忘れるお夏でなし。まー度振袖見せたさに皆々お針が縫うたれど。祝うて我も縫はんとて片袖ばかり縫ふ顔して。地是が蠟かと帶解いて上着を脱げば右左。振と詰との片ちぐに片枝は蕾片枝は開きそめたる花衣。二人前見る誰も皆ッシ斯くぞ仕立てて着せまほし。地清十郎は身を擲ち手を合せ。涙が零れて忝し。それ程に此の男を不便に思召さるゝかや。冥加に盡きん勿體なやと。フシ取付き。拜めば手に縋り。女房を拜む事かいの。是程思ひ合つた仲。なぜに女夫になられぬとフシ辛氣。泣きにぞ泣きゐたるヤアお夏様。詞いつぞやお前に借りました七十兩の小判の事。私が使ふ金にてなし傍輩の勘十郎。私詞に損をして平に賴むと申した故。地取替へ遣んと存ぜしが思ひも寄らぬ仕合して。損を塡めしと道すがらの話。もう入らぬ金子なれば戻しませうと言ひければ。アヽよいわいの婆様の讓の金。どうしても大事ない人の來ぬ間にあの蚊帳の。開眼をせまいかとこは〳〵顔ふ春風も。人目を忍ぶ綴子の蚊帳蚊帳はお夏に緣深く神の結ぶの釣手かと。戯れ交す手枕もすつり心〳〵せはしき契りなり。地内手代の源十郎お夏様ゞ丑那の呼ばつしやること出でけるが。はつと廣げし手も打たれず。呆れて立てば清十郎お夏が裾を引被く。お夏驚がす袖に隱しこれ源十郎。詞其方も男ぢや引かせはせぬ。忍んで逢ふは清十郎兄遁しにしてたもらうか。沙汰をするならするといや。幸ひ又物もこゝある。地直ぐに二人が死ぬる迄サア助けてたもるか殺しやるか。きつとした誓文で承らうと弱味を見せず。責付けられて源十郎。詞沙汰して私得もなし。詞冥利穩密なり。偽ならば各より私が先に。清十郎が脇差にて止めを刺さるゝ法もあれと。地言ひ捨て歸る其の舌も引入れず寄親の。勘十郎に打明けてフシ斯〳〵と語りし不實さよ。地二人は五體に冷汗の露の命も消ゆるばかり。居直つて溜息をつきもあへぬに親手代。ばら〳〵と走り出で。お夏が小腕引出し。清十郎も遁出づれば其の儘居れ身動せば。男ども撲ちのめせと取

廻せば。蚊帳の内にすご〳〵と盡の螢の影消えて。籠に寢るゝ其の風情外にお夏は夏の蟬。聲の限りを泣き盡くし思ひをくらぶるばかりなり。地親は腹立涙にて。地やれ女郎め。己れが母は流れの者。空言に身はまぶれても。心の細實さ公道さ千人にも稀なりしぞ。地いつ習うて其の淫奔遊女の腹とて何方へも。嫁に嫌ふは聞きつらん。其の袖下は何事ぞ。左樣な事をせんよりも己れが額に傾城の娘と。なぜ看板は打ち居らぬとメエテ齒ぎりを。してぞ泣きけるが。詞やい丁稚め不義一通は免しもあり。十一の年から子同然に育てしやつ。事によればお夏めと言ひ合せ嫁入道具に邪魔を入れ。親方に恥かかせ但馬屋の家を覆さうと巧んだな。地口の明かれぬ事見せんと證文出しこれ見たか。己れが請狀にある親めが印判。妹とやら嫁とやらが文とも合せて吟味した。弁子程も違ひなし覺えがあらう詐ぶな。主の寢首を搔かんも知らずエ、憎やと蚊帳越しに。額を三つ四つくらはせて フシ涙をこぼして怒りける。地清十郎はつと驚き。親の印判妹の手跡とは言ひ乍ら。親にさへ逢はぬ身が夢程も覺えなし。詞在所の親を召寄せて吟味もなされず。片手打のなされ樣。地勘十郎めどこに居る。言はせねば堪忍せぬと蚊帳より出づるを取つて押へ。詞ヤレ勘十郎源十郎は此の九左衛門が兩の眼の代りをする。其の手代が穿鑿して一札取つたに胡亂があるか。暇をくれた出て失せう。これや女子ども。地彼奴が這出に着てうせた布子があらう尋出し。引剝いで着せ替へ フシ追出せとぞわめきける。地お夏はかゝる有樣を目も當てられず涙にくれ。いはゞ我が身も遁れぬ科。餘りといへば親ながら。無得心なるお心や人の譏りも思召し。少しは宥免あれかしと フシ聲を。あけてぞ泣き居たる。詞ヲヽ慘いも辛いも知つたれども。己れが母が遺言に傾城の娘とて。悔られうかあさましや。未來の障りは是のみと返すゞ〳〵も歎きしに。氣遣するなよい智取つて。名を揚げさせうと請合しを嬉しさうに打笑ひ。地それで成佛々々とて死んだ顏はせ忘れ兼ね。千兩つける嫁入を止め大事の娘を教唆し。惑ひ者になしたる恨み但馬屋の九左衛門は。胴慾者慾い者といはれねばなき人の。位牌に向うて言譯ない胴慾者には誰がなせしと。わつとばかりに堪へかね。咽せ返りてぞ歎かるゝ。地其の間に下部ども衣裳を剝いで振袖の。汚れし綿衣に着せ更ゆればさしも美形の清十郎。山田の案山子とうぞぶるひ一目と見られぬ姿形。お夏は我も一所にと飛付くを下女腰元。引分け宥め教訓しフシ常の部屋にぞ伴ひける。地父はいよ〳〵腹を立て勘十郎は何處にある。何に恐れて引込むぞ清十郎めが入物吟味し。衣類諸道具押へ置き。追出せ追出せとフシ言ひ付け。奥に入りければ。地心得ましたと勘十郎。

半櫃箪笥昇出させぐわらりぐわらりと打明けて。衣類引出し取散らすは。三途川の奪衣婆のフシ呵責もかくやと哀れなり。地錠前を叩き割り提物指替取出せば。包の小判七十兩是は扨。此の金子はお夏樣へ婆御よりの讓りの金。身が包ませて覺えあり極つた大盜人。首のあるは旦那の慈悲。叩き出して追つ拂へと手足を取つて引出す。詞清十郎大聲あげ。ヤイ勘十郎盜人する男でなし。己れが私商に赤穂鹽買うて損をして首縊らねばならぬ首尾どうぞと談合したる故。お夏樣へ申して己れに貸す爲に預つた。地繼する者の因果で傍輩の機嫌取り。追從したが身の仇となつたるか口惜しや。詞己れが損は入れ合せ今は金も入らぬといふ。察するに此の度の嫁入道具の代銀を。遣らずに己れが引込んで我が親騙つて一札させ。人を損ふ工面とは鏡にかけて知つたれども。相談なければ是非もなし。是を見よ清十郎は破れ布子一枚で。地非人の體と

なつたれども心の內は紗綾縮緬。歸より潔いエゝ辛いぞやれ恨めしいと。スエテ齒噛をなして泣きけるが。地丹那に更々恨みはなし。十一歳の彌生の花いろはともちりぬるとも。知らぬ者の是程迄。算勘商賣讀書の。硯の海よりフシ山よりも。地勝つたる御高恩。拳一つ當らぬ身が。如何なる月日か今日の今日主從の緣切らるゝ。如何なる神の咎めぞや。今一度旦那の顏拜まんと駈入るを。地情なくも男ども手取り足取り大道へ追出し。門口はたと鎖しけるは詮方、もなき。三重へ次第なりフシまだ如月の。地朧夜や涅槃の雪の名殘の門。立止まりつ立去りつフシ凍え狼狽へ佇めり。地無慚やお夏は魂も。布子の袖に入るばかり身は拔殼の力も切れ。若しやと部屋を忍び出で門の戸明けてそつと出で。四邊を見れば人影のお夏樣かこゝにかと。言ふより先きに抱き合ひ聲を立てじと諸共に。肩の縫目に喰付いてフシ忍び。音に泣くばかりなり。地今の間の物思ひま一度逢はせて下されと。いくらの願をかけたやら清十郎の濟の字なれば。先づこゝの清水樣京の清水室の明神。書寫山伊勢の御神樣住吉樣金毘羅樣不動愛染大師樣拜み賴みし驗にて。顏を見て有難やサア二人連にて立退きて。如何なる遠國小借屋でも二人使ふを一人使ひ。一人使ふを手鍋でも暮されまい物でもなし。いざ立退かんとありければ。詞いやそれでは情の親方の憎しみも增るべし。在所へ歸り親どもと勘十郎めが善惡糺し。身の垢脫いて詫言せば御機嫌も直るべし。詞それ迄辛抱遊ばせと泣く〳〵宥慰むれば。繼しゆかしは身の氣隨男の爲には憂き苦勞。厭はずながら只一人突き放して遣られうか。詞これ此の小袖と脫ぎかへて。其の布子を逢ふ迄の形見に着んと。地涙ながら。互に帶解き身を合せ片袖づつを脫ぎかはす。肌睦しき心ざしオクリ戀路へならずば何故にフシ生れて知らぬ。木綿物。袱紗の衣と引締めて。顏

と顔を見合せて スエテわつと泣入る。心底に フシ萬の。涙籠るべし。地物にて顔を押包み。さらばやといふ所へ腰元下女ども。お夏様が御座らぬ裏の井戸よとひそめきしが。門口明けてこりや此處にぢや。詞アヽ申しお夏様。お前は悪い合點などちらの爲にもならぬ事。地先づ御入りと衣裳をしるしに。清十郎を取巻き フシ連れて内に入りけるに。地お夏續いて入らんとすこれ清十郎殿。詞お夏様がいとしくば先づ往んだがよいわいの。男のやうにも無い人ぢやと。地恥しめ突出し押出し。大戸をはたとさしければ。清十郎は詮方なく部屋へ入る體にして。大笠あけて身を縮め。そろり〳〵と忍び入り中より蓋をぞしめにける。お夏は門に憧れて入るべき便りを待つ所に。詞水仕の王はそろ〳〵と。門口あけてなう清十郎さま清さまと。お夏が袖を確と取り。詞あゝ此方は戀知らず。私が此方に袢されてお主様は袖になし。朝晩に心をつけしんぞ思ひを盡せども。お夏様に心中たて一度も靡いて下されぬ。地恨みのほむら火吹付。なゝや十四五すつとんとんと撲ち度いが。アヽいとしいが因果の種人は落目の志。詞コし此の餅は正月の。在所へやらうと思へども君に何が惜しからん。恥かしながら此の玉を食ふと思うて。賞翫して下さんせと地懐に押入るゝ。お夏は色を知らせじとじつと抱き付き締めければ フシぞつとする程嬉しい恨みの雲晴れ渡り。是で千倍々々とてもの事に盃せう。酒取て來ましよと入る跡に引つ續いてつゝと入り。部屋に駈け込み夜着引被き フシ身を顫はしてぞ臥し居たる。地清十郎はかくとも知らずお夏は外に如何ぞと。釜の蓋あけ見廻せば奥には人も寢入ばな。勘十郎は親方と寢酒の相伴ひよろ醉ひて。夜着蒲團引出し フシ常の所に臥しにけり。地跡より又源十郎これもほろ醉ひ來りしが。詞勘十郎もう寢たかと談合あり目をさませど。頬杖してぞ寢轉びける。いや寢入りはせぬサア話せと。夜着の中より煙草盆。寢ながら行燈引寄せて顔を並べて語りける。源十郎小聲にたり。其方が賴うだ鹽商の損銀。彼の金子ですまして。請取手形も餘り金も一所に上した屆いたかと言へば。フヽ過分々々慥に屆き請取つたが。其の狀も請取も大事にかけ笠の頂きに入れ置き。其の笠を道頓堀の群集に。芝居の木戸に預けて餘所の笠と替つて。地詮議しても知れなんだそれは失せても大事ない。お蔭で萬事忝いといへば。源十郎一段々々それにつき。清十郎めが諸道具七拾兩の小判迄。旦那が身どもに預けられた。お夏女郎と清十郎が盜み出した分にして。してやるやうな工面がなと分別すれど能はぬ智惠。そちが今度のおぞい仕樣魔法でも叶ふまい。どうぞ思案はあるまいかといへば勘十郎頷いて。詞嫁入道具の代銀をこちらへ使うて損を塡め。まんまと間には合せしが一度は大阪へ上す銀。あれをと胸

に當てゝ居る。地工面を聞けと呼き合うて吸付ける。煙草の先にて行燈はフッ消えて闇とぞ成りにける。地清十郎は幸ひと釜の内より這ひ出づる。酒に醉ひたる源十郎オクリとろ〳〵寢入る體なれば勘十郎搖り起し鼻に手を當て爲證したり。七十兩を盜み取り預り手の此奴に負はせんものと分別し。そつと起き出で源十郎を我が寢所に押遣つて夜着打被せ指足しッシ奥の。納戸に入りにけり。地清十郎はそれとも知らず扨は彼奴等は寢入りしな。エゝ憎さも憎しとても斯くなる憂き身なり。身代の敵この首尾に助けておめ〳〵戻られず。勘十郎めを刺殺しありがひもなき我が命。仕損うたら浮世は闇跡先見えぬ出來心。内の勝手は鬼えの恆下心の鏑もあら砥の研ぎ立て。葦ね寄れば高鼾前後も知らず不思議の本望。夜着引退けて咽喉吭をぐつと扶れば源十郎。うんといふを引起し肝先を一刀。又刺通して息を止め耳に口を差寄せて。詞こりや勘十郎まだ魂はよも去るまじい能つく聞け。傍輩に科を被せ身の爲にせし報いの劔。名乘り合うて殺さぬは近頃殘念至極ながら。詞讒訴したる此の顯骨と。頤かけて斬り下げ。此の胸から巧んだかと鳩尾先を背中まで。思ふさまに止めを刺し死骸を夜着に押包み立上れば血落ちて滑つて仰向にどうど伏す。はつと起きて蒲團にて足摺り拭ひしづ〳〵と。身仕舞して立つたる處に奥よりお夏は手燭の影。表へ出づるをこれ〳〵。ムゝ其處にかと走り寄り。血に滑つてアゝ怖と。聲を立つるを押鎭め樣子を呼き此の上は。一所に退かんといふ所へ行燈提げて勘十郎。納戸の方より來る體南無三寶人違へよしこれも汝が身の火を吹き消して車戸を。押明け飛んで出でにけり後れてお夏は詮方なく。蚊帳打上げ身を潜めフシ生きたる心地は無かりけり。此の音に勘十郎走り寄つて手燭をあけ。夜着引捲つてヤア詞源十郎が斬られたわと。地呼ばはる聲に主下人男女殘らず起き合せ。疑ひもなき清十郎門の戸明けたは落ちつらん。引入れあるか吟味せよと フシ上を下へと返せしが。詞なうお夏樣がござらぬわ。ヤアこれぞ曲物搜して見よと。地二階内藏樣の下湯殿迄搜せども。蚊帳の内は氣もつかず表の口に錠卸し。裏を搜さん尤と提灯點して駈惑ふ。お夏は我が身の恐しさ清十郎が氣遣さ。氣も逆立つて散亂し南無天照大神樣。觀音樣氏神樣死ぬとも二人一所にと。胸を騷がす折柄に勘十郎が聲として。詞蚊帳の内を見なんだ搜して見よといふ聲す。地南無三寶と飛んで出で表には錠おりたり。裏には大勢充ち滿ちたり後へも先へも因果の網のかゝる憂き身は佛神の直なる法も横町の。間の細路次蹴破ればさつと開くも戀路の念力。かけし願ひの神力の神變奇特毒蛇の口。遁れ出でたる如くにて落ちんと契り西の辻東の辻にない我が夫〳〵と。聲を限りに往き歸り扨は

俘となりけるかと。はや狂亂となる躾の聲の末にあれお夏。〳〵と呼ぶわいのおう。〳〵そこにか何處にぞ。いや〳〵いや待て暫し。あれは我が家に父の聲我を尋ねて我を呼ぶ。親もゆかしや夫も戀しや。父は子を呼ぶ夜の鶴我は夫呼ぶ野邊の雉子。追つかけ行かん夜は何時ぞ。鐘は幾つ。八つか七つか。曉風の。辻行燈を吹き消してコハリ道も心も地眞暗〳〵。くる〳〵〳〵〳〵狂ひ亂れ泣き亂れ。亂

れて諷ふ鶏の。卵を渡る危さの狂女となるこそ　三重〳〵哀れなれ。

お夏笠物狂　下之巻

夜さ來いと。いふ字を金紗で。縫はせ。裾に清十郎と寢たところ。裾に。清十郎と寢たところエ。少くわん。歌念佛觀ずれば夢の世や。寢て溫めし懐子。ギンいつの間にかは浮かれそめ。三界を只家として。袖笠雨の。宿にも。心止めぬ。フシ假枕。地流にあらぬ川付の。笠の小笠の

拍板。花の手鞠。お手を引かれた。是も熊野の フシ修行かや。姉様のこれの。勸進柄杓の。笑顔よしとて ギン柳が招く。柳の髪を何故に浮世恨みて尼が崎。尼が崎とは海近く。小オクリなぜに。其方はしほがない節はあはれに身は伊達に。スエテ歌は念佛の歌比丘尼。歌向ひ通るは清十郎ぢや無いか。笠がよく似た。嘗笠が能く似た笠が。笠が能く似た菅笠がる。笠をしるべの。フシ物狂ひ。太夫地物に狂ふも我ばかりかは。鐘に待宵烏には別れ。戀する人の夜なノ〳〵を氣違ひとてな笑ひ給ひて。ウタヒ傳へ聞く孔子は鯉魚に別れ。思ひの火をば胸に焚き。白居易は又我が子を 二人先立てゝ枕に殘る。藥恨むは 理やそれは子故の。別れの涙。フシ親より子より我が身より。ハルフシいとし殿御の。いとしほや。地それより便宜音づれの。聲も聞かねば顔も見ず我は秋鹿つまを戀ひ 歌かいろと。なく。とフシ知らせ度や。太夫地ヨハリなう〳〵あれなる御僧我が殿御返してたべ。いづくへ連れて行く事ぞ。男返してたべなう。ワキ地いや御僧とは空目かや。我もこがろゝ丸太舟浮世を渡る一節を。謠へや謠へ泡沫の。二人歌小舟造りてお夏を乘せて。花の清十郎に櫛を押さしよふくわん。地觀音薩陀の誓ひには。枯れたる木にも花笠。太夫笠に挿いたは梛の葉。ワキ腰に挿いたも梛の葉。太夫一枝。ワキ二枝。地二八三日に三枚七日に七枚。起請誓紙の。牛王のうらなく灰に燒きつつ互に呑んだる。水も漏さぬ。フシなかく〳〵に。スエテ引きも合せぬ神心。熊野の神のお留守かや。地足柄箱根玉津島貴船や三輪の明神も。神とも覺えぬ神ならば尋ぬる人に逢はせて見や。太夫それ〳〵逢はせず逢はれぬは皆傷りの御神と。誹つても祈つても。神の力も叶はぬかと。笠も髻もかなぐり捨て狂ひ。歎くぞ哀れなる。二人共に。濡せる尼衣。ワキ二人の比丘尼も涙を抑へ我も尋ぬる人故に。假に俏せし修行の姿は變るとも。まだ面影は殘るべし。教へ道思ひ當る事あらば。知らせ申さん國所フシ有樣語り給へとよ。太夫嬶しの人の問ひ事や。國は播州姫路の者。尋ぬる夫の姿形。フシ姿は詞に。話るとも心は筆も及びなき。ほんじやりとしてきつとして花橘の袖の香に。昔男の業平づくり黑い羽織が好き梳き油。鬢つき髮つき眞黑々。黑目がちなる目の中に鼻筋通つて櫻色。年頃は廿餘り丈高からず低からず。茶の湯盤上打囃子男の藝に一つでも。瑕なき玉の盃の。酒もよい酒假名文書き手の秋の露。轉び寢し夜の 認師 睦言はギンフシ おれと。其方が中なで。岸の濱松根堀れても。漏すまいぞや顯すな。變るまじきと。末かけしオクリ末の。松山浦の波。地上越す人も。たかりじに友朋輩の猜みにて。犯さぬ罪の仇名を喞ち世を憂き物に出で給ふ。今は我が名を包みても何かそのかひ夏はつる。扇の女の物狂ひ。其の人の名は フシ清十郎。地ありし姿は變るとも。まだ面影は殘るべし。教へ

てたべの人々とて ワシ伏し沈。みてぞ泣きゐたる。

ワキ地 二人の比丘尼縋り付き扨こそは餘所ならぬ。一つ流れの和泉の國其の人の爲にこそ。我は妹。 太夫 我は嫁。 二人 親の歎きを宥め兼ね ワシ共に亂るゝ我が身ぞや。 太夫 狂女といふも。何故ぞ。 ワキ 其方は妹背の忍ぶ草。 太夫 身は同胞を思ひ草。 二人 同じ所縁の草葉ぞと手に手を取りて泣叫ぶ。 ワシ物の哀れを止めける。 なうあさましや今里人の語りしは。詞但馬屋の清十郎は人を殺めし科によつて。方々へ追手かゝり。長崎とやらんにて終に捕はれ囚人と成り。あの松蔭の竹垣にて七日曝し其の後は。地但馬屋の門口に獄門に懸けらるゝと語りし故。せめて餘所目の暇乞に是迄参りしが。御存じなきかいとほしや何我が夫は捕はれて遂に首を斬らるゝとや。それは誠か今迄は狂氣の中にも若しもやと。頼む念力切れ果てゝ。同じ刀に斬られんとスエテ駈出づるを ワキ二人の尼。歎きは變らぬ吾々なれど最期に心亂れては。人の跡後世の爲。皆其の人の仇ぞとて 泣く〳〵制し止むれば。二人ワシ 早や先拂の。地警固の者山賊夜盗の其の如く。嚴しく固め引出すは生きての思ひ死する罪。もと一筋の縛めの。縄目に逢ひて清十郎 ワシ引かれ出づるぞ無慚なる。 ワキ 矢來の内に上壇を構へ高手を許し羽交締め北向に引き据ゆたは目も當てられぬ風情なり。 太夫 お夏は涙に目も明かれず聲も立たねど伸び上り。なう此處にゐる是こゝに顔を向けて下されと。二人呼ばはる聲も往來の群集の歎き念佛に。地紛れ聞えぬ哀れやな不便やな清十郎。顔も形も痩せ衰へ最期極る心にも。後生菩提も思はれずお夏が歎き故郷の。親兄弟は如何ぞやお夏に知らせ今一目。せめて面影はかりでも冥路の方を見廻して目と目をふつと見合せて。 太夫 お夏はわつと泣き出す。 ワキ 清十郎は聲立てず。 腦より出づる憂き涙刀の刃より先づ先にスエテ思ひに命絶えぬべし。 二人地 涙を中の架橋と。心通はす心の色世に取沙汰の諺や 引 歌 清十郎殺さばお夏も殺せ。生きて思ひをさしよよりも。思ひを生きて。生きて思ひをさしよよりもエ なまみだ〳〵南無阿彌陀。南無阿彌陀佛なまみだ〳〵。 地 南無阿彌陀佛と回向して ワシ皆々袖をぞ絞りける。地清十郎涙を抑へ。詞何れも有難き御回向千金萬金より。一遍の回向に勝る寶なしと承る。最期の悦び何事か是に加かん。さり乍ら心にかゝるは此の高札。 主人の金七十兩盗むとは身に取つて覺えなし。 相手勘十郎を斬殺さんと思ひしに。誤つて人違へ遁るゝも業悦びならず。 殺さるゝも業歎きにあらず。地其生年廿五歳十一歳の春より奉公し。主人の育み情にて。商人の道一通り。 藝能文字の本末迄人並になつたるも。皆これお主の ワシ御高恩。明暮主の教へに任せ親に孝行主に忠。詞貞正直を守つ

て一言も。偽りを言ふまじと毎朝天道氏神を祈りしかども。地若き者の悲しさは只非業に死なんとは思ひも寄らず。佛ども法とも一遍の念佛申せし事もなく。スエテ今の悔しさ詮方なく。詞高き山の頂にて。一杯の水を求むるが如しとは此の身の上に知られたり。地此の群集の中にこそ。清十郎が一命に代らんと歎く人もあるべきぞ。必ず〳〵僻事なり存らへて追善し。菩提を弔ふ善根こそ命を助け。不老不死の藥を與ふるよりも嬉しきぞや。人々の回向を受け佛の御國に到らんと。思へば〳〵此の世の絆はふつつと思ひ斷つたぞや。アヽ思ひ斷つても斷られぬはいとし可愛の只一人。よし是も夢の戯れ頓證菩提南無阿彌陀佛と。潔くは言ひけれどもお夏が歎き妹の。變れる顏を尻目にかけ覺えずわつと泣き出せば。お夏を始め二人の尼警固の上下緣もなき。貴賤群集に至る迄フシ皆々。袖をぞ絞りける。稍あつて清十郎如何に警固の方々。詞口渴きて苦しきに煙草一服所望したし。此の群集の其の中に姫路の人もあるならば。地吸付けて賜はれかし情のお主の御手より。末期の水と觀念せん如何あらんと言ひければ。詞苦しからじそれ〳〵と煙管煙草を出しける。地お夏悅びなう我こそ姫路の者。一樹の蔭も他生の緣況して一つ國なれば。未來も一つに生るゝため約束の煙ぞと。餘所ながら暇乞煙草吸ひ付け垣越しに。警固の者取次ぎて清十郎に渡しける。夫婦は物も言ひたけに顏振上げしが噎せ返る。涙を中の闕の戸にて兎角の詞も出でばこそスエテ泣くより外の。事はなし。地漸う涙を押止め人も多きに御身の手より。末期の一服を受くる事の有難さよ本望さよ。此の煙草にて十惡五逆の眠を醒し。詞充滿其願如清涼池と嘯きて。地獄餓鬼畜生修羅此の四惡趣の苦患を解脫し。吹出す煙は沙羅林桁檀の馥と變じ。三寶供養の燒香となつて。三十三天に薰じ渡らば日月は。兩の眼に入替り給ひ。梵釋二天に手を引かれ奉り。佛の御前に此の度は立別るゝとも藻鹽燒く。煙は同じ鷲の山靈山淨土で待つべきぞや。南無阿彌陀佛といふより早く煙管おつ取り雁首迄。咽喉の内へ押込んでフシ眞逆樣にぞ伏したりける。地警固の上下ふためきてそれ殺すなと引起せば。色も變つて目眩き血は紅の瀧つ瀨と。口に流るゝ風情を見て口惜しや後れたり。我こそ清十郎が二世の妻但馬屋のお夏。人々の情には同じ土に埋みてたべ。南無大悲觀世音助け給へと。立てたる拔身の槍おつ取り喉吭ぐつと突通す。二人の比丘尼抱き付きなう皆樣賴みますと。泣けど叫べど囚人の自害に各仰天して。いたはる人も無かりしはフシ是非に叶はぬ次第なり。地城下にかくと注進す代官所の役人。馬を飛ばして駈來り矢來の内に飛んで入り。詞大聲あげてヤア早まつたり清十郎。汝傍輩の源十郎を人違にて殺めし段は白狀紛れなしと雖も。盜人

の科未だ分明ならぬ故。曝し者として成敗の日を延し。盗人の本人顯れなば汝が命を助けんとの評議なりしに。地近頃殘念千萬なり只今但馬屋一家を召寄する。事の詮議濟む迄の命を生きんと思はぬか。狼狽者と力を付け二人が口に氣付を入れ。樣々看病なし給へばお夏は少し息出づる。清十郎は心配の臓腑を破りし長煙管ッシ賴む方なく見えにける。地程なく但馬屋九左衛門手代勘十郎。一家殘らずお召によつて參りたりとぞ訴ふる。詞かゝる處へ老たる百姓慌しく狼狽へ來て。一目見るより南無三寶しなしたり。地待てむざ〳〵と一人は殺さぬ敵を取つてとらせうと。せき來る涙を押拭ひ謹んで。詞我等は清十郎が親和泉の國水間の左治右衛門。年奢ながら面目なや其の勘十郎めにたらされ。お主を大事子が可愛さよしない手形なんぼう後悔仕る。それにつき其の時分。娘子供が道頓堀にて取違へ歸りたる。笠を此の頃取出せば頂きの下に此の文あり。地御詮議なされ清十郎が科を輕め下されと。涙を流して訴訟するそれ〳〵是へと取上けて披見ある。詞幸便に任せ一筆啓上せしめ候。此の度お夏樣嫁入道具の代金百四十兩の内百廿一兩受許にて鹽問屋へ相渡し。貴樣の損銀殘らず濟し則ち請取手形。殘金十九兩上し申し候追付け御下り待入り候。但馬屋勘十郎殿參る同源十郎。何と此の手跡相違なしやと仰せける。九左衛門一見して。相果てし源十郎が筆判形共に疑ひなし。サア返答あるか勘十郎御前にて申せ〳〵と責め付くれば。勘十郎少しも怯まず。尤も我等私商損金の流用に。道具の代金暫く取替へ置きたれども。追付け右の金は才覺して道具屋へ濟し置く商賣の習ひ廻り金の無き時は。氣轉を利かせ表裡を使ひ主人の金を手前へ加へ。自分の銀を主の銀に廻し間に合するは。世間ともに手代の習ひ我等ばかりに限るでなし。あの清十郎は傍輩を斬殺し。金七十兩盗み取る是も手代の習ひか。地エヽ殘り多いまそつと早う生れたら。熊坂の長範か石川五右衛門が手代にせば。よい給分を取らうものをとッシ憎體にこそ申しけれ。地今を最期の清十郎眼をくわつと見開き。詞やい〳〵勘十郎廣い世界を己れが口から。世間手代の習ひとは顯が過ぎて聞き憎い。惡い事を習ひと言はば主殺し親殺し。屋燒き强盗世間の習ひと許さうか。人を殺せば我が身も死ぬる。此の清十郎が七十兩や八十兩の金に代へる命でなし。且那の御恩お夏樣の情に捨てゝと思ふ身を。地己れが口一つにて勘當させ其の怨み己れをたつた一討に仕舞はうと思うたに。仕損うて口惜しし。エヽ〳〵無念なロを利かするなあ。ハッ〳〵我等故にお夏樣の自害。御恩の旦那の憎しみも嘸や增さらん情なや。此の年迄の御面倒御恩を。報ずる事もなく。御苦勞をかくる事是ぞ黄泉の障りとなる。詞これ親父樣妹ど

もと。地呼び問け顔をじろ〳〵と言ひ度き事のありさうに。目は働けど息切れに人脈絶ゆる兩眼より、涙ばかりを暇乞。親子他人の隔てなく フシ皆々哀れを催せり。地左治右衛門涙を流し申し殿樣。詞勘十郎がお主の金を引負ひし。我等を騙した慥な證據出づるからは。七十兩も彼奴が盗みに極つた。御詮議なされ清十郎を御助け下されとスエテ大聲上げてぞ申しける。詞代官職聞き給ひ尤々。不便なれども清十郎は人を殺せし。白狀紛れなき上は斷罪遁るゝ所なし。又勘十郎が七十兩盗みといふには證據なし。然れども勘十郎己れ一旦主人の金子をわだかまり。清十郎親子に無實を言ひかけ。迷惑させし不屆者皆己れが惡心より。事起つてお夏も自害に及びたり。主殺しとも謂ひつべし。屹度仕置に行ふべきが。手を出して人も殺さず盗人に極る證據なければ。慈悲を以て助け置く命の代りに髪を下し。出家して彼等が菩提を弔ふべきかと仰せける。ハヤ、地有難しと勘十郎頭を地につけ三拜し。小刀抜いて髻よりふつつと切つて捨てければ。詞チヽ神妙々々佛弟子と成りたれば。縱誠の科あつてもいよ〳〵命は取り難し。此の上は汝が行末彼が後生の爲ぞかし。和睦して恨みを晴らさせ往生させよとありければ。勘十郎一念發起してこれ清十郎。今は我も懺悔せん。彼の七十兩の小判は此の勘十郎坊主が盗んで。源十郎めに塗らんと思ふ折節。斬られしを幸ひに其方に負せたり。地恨みを晴れて成佛あれ跡弔らはんといふ所を。扨こそ盗人顯れたり其奴括れ承ると。踏付け〳〵腕捻ぢあげ フシはや切縄にぞかけてける。地ツメ直に國中引渡し獄門に切りかけよと。引立つれば妄執も晴れつゝ清き清十郎。臨終顔も菩薩の數廿五歳の命は消えて浮名は今に殘りけるお夏も共にと取付くを宥め伴ひ立歸り。其の夏衣墨に染め。年忌。年忌の手向草花の帽子に修行の笠。笠が能く似た阿彌陀笠彌陀の。御國に生れけゝ。